

持続可能な低密度社会に関する萌芽的研究 Exploratory Research on a Sustainable Low Density Society



小南 弘季
Hiroki Kominami

本研究は、人口減少と少子高齢化が最も進行している日本において、地方社会の持続可能な未来を模索する試みである。現在、地方の将来像としては市街地における居住の高密度化が唯一の選択肢とされがちであるが、本研究はそれに異を唱え、人口密度の低さを前提とした新たな生活様式と社会の可能性を提示しようとするものである。まず、こうした生活が成立しうる地理的条件を明らかにするために、総務省統計局が定める標準地域メッシュ（第3次地域区画）に着目し、「人口が1,000人から2,000人の範囲にあり、かつ2,000人以上のメッシュと隣接しない地域」を選定した。次に、その基準に該当する地域から50か所を抽出し、現地でのフィールドワークを実施することで、低密度居住地域が有する潜在的な可能性とその多様な実態を浮かび上がらせた。

This study explores sustainable futures for regional societies in Japan, a country experiencing some of the most advanced stages of population decline and aging in the world. While urban densification is often presented as the only viable path for the future of regional areas, this research challenges that assumption by proposing alternative modes of living and social organization that are premised on low population density. To identify geographic conditions suitable for such lifestyles, the study focuses on the standard regional mesh units (third-level grid squares of approximately one square kilometer) defined by the Statistics Bureau of Japan. Specifically, it selects areas with populations between 1,000 and 2,000 that are not adjacent to any mesh units with populations exceeding 2,000. Based on this criterion, fifty such areas were selected, and fieldwork was conducted in each. Through these investigations, the study reveals the potential and diversity inherent in low-density residential regions.

研究の背景と目的

出生率の低下と大都市への流出加速による人口減少が、現代の日本の地方に存在する市街地や町村に与える影響は甚大であり、生活拠点の消滅、インフラストラクチャーの維持困難、医療や教育制度の崩壊など、地方は地域社会の存続を決する問題を要している。

1990年代以降、おもに都市工学分野において、生活機能やインフラストラクチャーを中心市街地に集約し、周囲の低密度な都市的地域と機能的に連携することで効率化を図り、上記のような状況の改善を計画する、コンパクトシティ・プラス・ネットワークモデルに関する研究が、地方都市圏を対象に展開されてきた。その結果、上記モデルは一部が制度化され、都市政策に導入する自治体が増加し、なかにはすでに成果が表れている自治体も存在する。しかしながら、そうした研究の焦点は中心市街地のみに置かれ、周囲に位置する低密度な都市的地域の理解は進んでおらず、それらの間に構築すべき「ネットワーク」に関する検討も十分ではない。

そこで本研究では、以下の2つの問いをもって上記の課題に答えようとする。1つは、日本の非都市域における都市的地域、つまり、総務省統計局が定める標準地域メッシュ（第3次地域区画）に着目した際の「人口が1,000人から2,000人の範囲にあり、かつ2,000人以上のメッシュと隣接しない地域」の有する空間が、前近代においてどのように形成されてきたのか、そして近代化・経済成長・人口減少を通じてどのように変容したのかという問いであり、もう1つは、上記の空間が人口減少下の地方社会においていかなる価値をもち、現代の都市計画においていかなる機能をもちうるかという問いである。

上記の問いを念頭に、以下の3点を研究の具体的な目的とした。第一に、上記のような低密度居住地域の社会的・空間的な実態の検証を通して、これまで見過ごされてきた現代日本の居住環境の一面を描き出すことであり、それは都市と生産後背地の中間的領域に位置する住居集合という、今後の社会における自然との共生や自律分散的な居住・生産のあり方を考えるうえで重要となる主題の提示である。第二に、史料調査や観察調査、インタビュー調査にもとづく風景の構造分析により、場所の価値を把握するといった新たな研究手法を実践的に構築すること、つまり、日本の地方社会における居住の現代性に対する新たな研究アプローチを提示することである。第三に、低密度居住地域が有する拠点としての価値とネットワークの機能性を検証することにより、コンパクトシティ・プラス・ネットワークモデルを批評的に発展させることである。これによって、地方における多様性に富んだ持続可能な社会像を提示し、地方で生活するという積極的な選択肢を創出することで、未来における人間の居住様式に新たな可能性を与える。

研究経過

都市と比較して建物の更新が遅い低密度居住地域では、もとより伝統的な素材や構法を用いた建物が多く残っている。また空地の面積が大きいと、建物が連続する様子をより大きな情景として視認することができる。そして、低密度であることによる余白や地形の豊かさ、都市のように厳正な制御下でないことによる空間構築の自由度、そこかしこに残る文化や生活の形跡など、低密度なまちがもつ豊かな風景が存在している。

通常人口密度というと、その分母となる領域は行政区域や都市計画区域など恣意的なものであり、多くの場合において広すぎたり、狭すぎたりするため、実際の空間利用のありようとそれらの数字が感覚上一致することはあまりない。その一方で、1キロメートル四方のメッシュにおいて人口密度を測るメリットは、山林や湖海などの周辺環境を含めた密度によって空間利用を評価できることにある。

また、1平方キロメートルあたり1,000から2,000人という数値は、神代雄一郎がかつて言及したコミュニティーの成立に必要な人口が千人以上であること、そして総合地球環境研究所の「メガシティ」論における2,000人が都市と非都市の境であるという分析に依拠している。城壁都市を主とする西欧世界に対し、水稻栽培のための田園集落を主とするモンスーンアジア、なかでも長期にわたる安定した政治体制によって街道が発達した日本においては、上記の人口規模を有する地域が多くみられる。

日本においては約1,700か所の低密度居住地域が存在しており、興味深いことに1キロメートル四方のなかに1つの住居集合のまとまりが収まることが多い（それらが複数メッシュにわたって連続する地域も存在するが）。小学校区の単位距離が1キロメートルであるということも考慮すべき事実である。

この密度規模にはさまざまな都市類型が含まれるということも重要である。街道集落や港町、漁村集落を核に発

展したまちをはじめ、ほかにも城下町や宿場町、門前町、在郷町、温泉町、鉱山町、農村集落などを核として戦後に拡大したまちや、あるいは戦後に開発されたニュータウンがこの規模に該当している。これらのまちは、産業や交通の変化によって都市にならなかった場所であるともいえるが、一方で現代における1つの指標となる人口規模を有する住居集合であるといえることができる。

低密度なまちの多くは都市と生産後背地を中継する、いわば生産と消費の結節点となるような場所に位置しており、本研究では、都市と集落のあいだに位置し、両者の性質をもつ〈まち〉の風景とその空間が有する潜在力を調査する。

本研究では、日本に約1,700か所存在する低密度居住地域のなかより、全国で50か所を選定し、実際に訪れ、フィールドワークを実施した。それらの地域は以下の通りである。

①弟子屈（北海道上川郡弟子屈町）、②江部乙（北海道滝川市）、③厚岸（北海道厚岸郡厚岸町）、④京極（北海道虻田郡京極町）、⑤高杉（青森県弘前市）、⑥五百森（岩田県八幡平市）、⑦寺池（宮城県登米市）、⑧角間川（秋田県大仙市）、⑨浜中（山形県酒田市）、⑩玉井（福島県安達郡大玉村）、⑪荒井（茨城県鹿嶋市）、⑫延方（茨城県潮来市）、⑬益子（栃木県芳賀郡益子町）、⑭用土（埼玉県大里郡寄居町）、⑮不動堂（千葉県山武郡九十九里町）、⑯長者（千葉県いすみ市）、⑰粟生津（新潟県燕市）、⑱夷浜（新潟県上越市）、⑲上市（富山県中新川郡上市町）、⑳穴水（石川県鳳珠郡穴水町）、㉑猿橋（山梨県大月市）、㉒野沢温泉（長野県下高井郡野沢温泉村）、㉓富士見（長野県諏訪郡富士見町）、㉔高須（岐阜県海津市）、㉕古沢（静岡県駿東郡小山町）、㉖布土（知多郡美浜町）、㉗波切（三重県志摩市）、㉘香良洲（三重県津市）、㉙下之郷（滋賀県犬上郡甲良町）、㉚三河内（京都府与謝郡与謝野町）、㉛和田山（兵庫県朝来市）、㉜岩屋（兵庫県淡路市）、㉝下津野（和歌山県有田郡有田川町）、㉞浦富（鳥取県岩美郡岩美町）、㉟古浦（島根県松江市）、㊱阿部（岡山県高梁市）、㊲中庄（広島県尾道市）、㊳久賀（山口県大島郡周防大島町）、㊴半田（徳島県美馬郡つるぎ町）、㊵畑田（香川県綾歌郡綾川町）、㊶長浜（愛媛県大洲市）、㊷白浜（高知県安芸郡東洋町）、㊸中木室（福岡県大川市）、㊹犬井道（佐賀県佐賀市）、㊺船津（長崎県諫早市）、㊻竹迫（熊本県合志市）、㊼竹田（大分県竹田市）、㊽三田井（宮崎県西臼杵郡高千穂町）、㊾新富（肝属郡肝付町）、㊿山川（鹿児島県指宿市）。



図1. 50か所の低密度居住地域

Fig.1. 50 low-density residential areas

低密度居住地域の多くは都市や集落のような空間構造の明確さをもたない。それらは複数集落の集合であるとともに戦後の居住区域の拡大を含んでいるからである。そのことによって、これらの地域は多くの空地をその内部に抱いている。同時に、(地形を拠り所にして形成された)伝統的な町が核となっているため、その地形は複雑なものが多く、都市化が十分に進んでいないこと、空地が多いことにより、微地形を感じやすい。それぞれの地域は（普

遍性はみられるものの）個性的な形態と歴史を有する空地を有している。

このような余白の空間がどのように利用されているかが低密度居住地域における観察対象となる。また、これらの地域は自然環境に隣接しているため、しばしば空地や街路には植物や動物、あるいは砂や雪、風が入り込むため、それらに対する境界装置のありよう、つまりは余白の空間に対する建築的ふるまいにも、地域の個性があらわれる。そして、それらにはその地域の産業や文化が大きく影響を与えている。地域の余白を通して見る境界の立ち現れかたが、周囲の地形を背景にさまざまな風景として表出するのである。



図2. 巨大な畑のあるまち（福島県安達郡大玉村玉井周辺）

Fig.2. Town with a Large Field (Tamanoi, Otama Village, Adachi County, Fukushima Pref.)

研究成果及び考察

低密度居住地域のもつ潜在的な可能性は以下の5つの論点において評価できる。

まず、第一に密度である。人口密度が低いからこそ居住環境に余裕があるとともに、様々な大きさや形状をもつ空地が地域のなかに存在しており、気候や地形、社会、文化、歴史に応じた豊かな利用がなされてきた。

第二に集合性。市街地に比べると人口密度は低いが、古くから一定以上のまとまりをもって存在する地域だからこそ、空地利用や境界装置などにみられるような、独自の文化的景観が育まれている。

そして、第三に自然環境を挙げることができる。生活のための人工物と、山や海川などの自然環境、そして耕作地、または荒れ地がおおよそ均等に混在しており、それらが重なり合うことによって、複雑で多層的な景観と体験をつくりだしている。

第四に中継性。低密度居住地域の多くは、市街地と生産後背地を中継するような、それぞれに距離の近い場所に位置している。

最後が開放性である。交易や交通の拠点として発展してきた地域が多く、時代の流れに応じて柔軟かつ開放的に変化を遂げてきたため、他者の存在や状況の変化に対して否定的でない。

これらの性質を評価するために、以下の3つの方法をもってフィールドワークの手法を更新した。

1つは、その対象を中心に関係をもって広がる領域を理解し、場所に蓄積された断片的な文化的、政治的意味を

読み取ることであり、2つ目が、日常的な維持と変化の過程、そして現在のすまい方を、口頭取材を通して明らかにすること。そして3つ目が、身体性、多元性、参与可能性の観点から、空間的・景観的価値を評価することである。

身体性とは、低密度居住地域の風景が、誰もが想像できる1枚の絵葉書のようなはっきりとしたイメージではなく、観察者の動作や五感、つまりは身体感覚に依存して認識されるものであることを示している。それらの風景は刹那的であり、断片的である。例えば、坂道を下りながら望む遠方の風景や振り向くと同時に目の前に広がる風景、強風に吹かれながら目を細めて見る風景などがそれにあたる。

寓喩性とは、これらの地域がその余白の大きさゆえにあらゆる物を並置／放置することができること、そしてその結果、それらの風景がさまざまな時代や集団、事件に関する記憶を同時多発的に喚び起こさせることを示す。

参与可能性は、住民であれば誰もが地域の風景の形成と維持に関わることができることを示している。一次産業による継続的な環境改造から、庭づくりのような小さいが連鎖を生み出す活動、あるいは上述のような物の放置まで、環境へのあらゆる参与が可能であり、自立共生の基盤となる。

これらは余白と境界に拠る性質であり、都市においては難しく、低密度居住地域において可能な性質であるといえるだろう。

ところで、これらのような3つの性質をもち合わせた風景を有する低密度居住地域には、複数の雑多な事物が並列するような状態のうえに、まさに外から入り込んだ「自然」が人間の生活とのバランスを探りながら生き生きと生命を満喫し、それを相手にさまざまな感覚や事物が同居している。その一方で、低密度居住地域での生活が楽土的であるわけではない。そこでの生活は自然環境とのせめぎあいであり、必ずしも都市のように管理され、守られた環境にないということに意識を向ける必要がある。そうした状況のなかでこそ、前述した3つの性質に共通するようなインタラクションやインタープレイ、そして新たなデザイン文化が生じる。

先述のように、低密度居住地域には他所からわざわざ訪れるような特別な風景はない。そこにあるのは小さく断片的な風景であり、それらの多くは文化財として価値の高いものではなく、雑多な要素が入り混じる、とるにたらないものである。

しかし、それらの断片的な風景こそが、低密度居住地域を描くうえで決して見失ってはいけないものなのである。これらの断片的な風景は、歴史の大きな流れを代表するようなものではなく、むしろその流れの大きさと速さに取り残された事物の集合であるといえる。それらはすでにさまざまな物語をもっているが、そのフィクショナル리티は小さいながらも新たな渦を起こす中心となりえる。つまり、さまざまな個人によって集合的かつ断片的に形成されてきたとるにたらない小さな風景だからこそ、新たな小さなデザインのアンカーとなるのである。

歴史的に余白と境界を多く有する低密度居住地域には、個性豊かな断片的な風景が豊富に存在している。それらの風景から過去と現在の複数の物語を読み取り、地域の可能性を見出していくこと、それがこの研究の中心的な課題である。

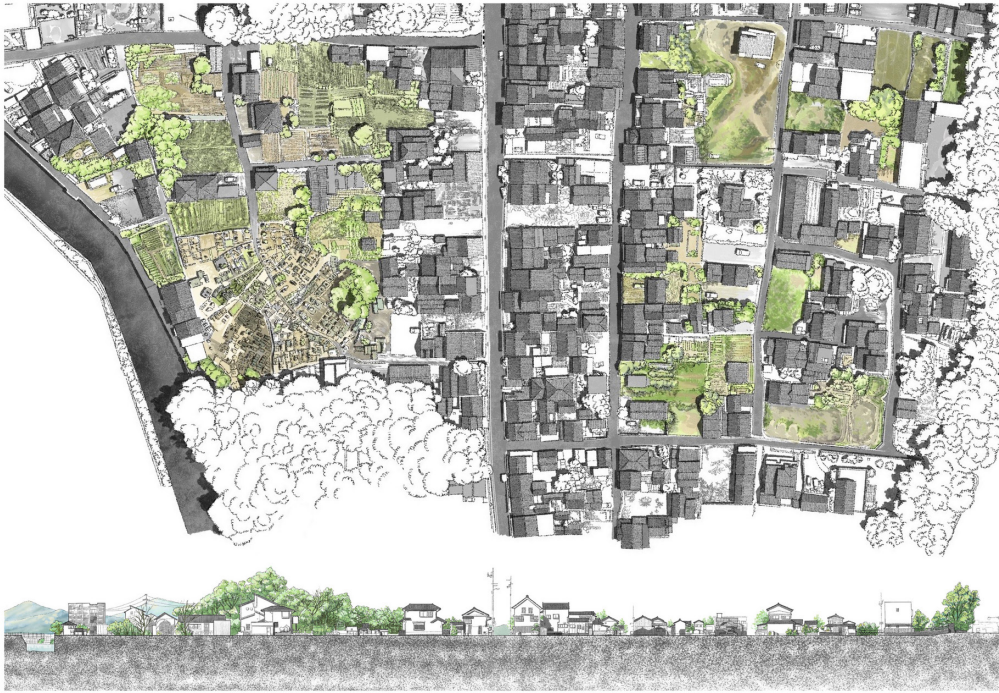


図3. ドローイング（高知県安芸郡東洋町白浜周辺）

Fig.3. Drawings (Shirahama, Toyo Town, Aki County, Kochi Pref.)

今後の展望

低密度居住地域は、仕事や教育、娯楽や刺激、そして利便性といった点において都市に及ぶことはないが、その一方で、身体感覚や記憶、風景への参与といった、住まうことの豊かさに関わる問題においては都市に秀でる部分がある。また、山間や浦浜の小さな集落とは違い、ある程度の人口を擁してきた場所であり、生産後背地の中心として交易や政治を担ってきたため、現在でも比較的開放的な空気感を有していることが多い。

都市の中心市街の近くに位置するまちも多く、自動車通勤することも可能である。また、歩ける範囲にスーパーがあるため、日常的な買い物に困ることもない。都市での生活に慣れ親しんだ多くの人びとにとっては、こうしたまちで暮らすことは困難を伴うかもしれないが、高密度な都市を離れて異なる環境で暮らしたいと望む人にとっては良い選択肢になると考えられる。人を新たに迎え入れ、経済を好転させることで、生産後背地と都市をつなぐ拠点としての機能と活気を取り戻すとともに、日々の暮らしにデザインの機会を与える場所となることを期待する。

引用文献

- [1] 明治大学工学部建築学科 神代研究室編『日本のコミュニティ その1 コミュニティとその結合（SD 別冊 No.7）』（鹿島出版会、1975 年）。
- [2] 村松 伸、加藤浩徳著、森宏一郎編『メガシティ 1 メガシティとサステイナビリティ』（東京大学出版会、2016 年）。